

# The Gallery voice

NO-27

編集・発行／画廊 沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX(098) 888-6117 / 2006.11.18

## ＝ 金城満の表現行為が導き出すもの＝

佐喜眞道夫

金城満の作品「石の声」と「鉄の記憶」が佐喜眞美術館に展示されている。いずれも沖縄戦と深くかかわるテーマで彼が生徒たちと共同作業で成立したコラボレーションである。

沖縄戦の記述が教科書からどんどん消えていく。歴史を忘却する国にどのような未来がくるのだろうか。地上戦を体験した沖縄においても沖縄戦のことを知らない若者が増えて高校生も「沖縄戦で 20 万余りの人が死んだというけれど実感がわからない」という。

美術館にやってきた金城満は、「『石の声』について沖縄戦の戦死者と同じ数の『石』に『番号』をふって積み上げる。生徒の頭の中で単なる数字になってしまったものが質量が変わっていくことによって、今まで見えてこなかったものが見えてくるだろう」と熱く語った。作業は 1996 年、6 月 15 日から開始した。約 80 人の高校生たちが美術館の前庭の小石をひたすら集め、1つのビニール袋に 200 個の小石を入れていく。炎天下での作業が延々と続いた。1000 個余りの白いビニール袋が美しい大きな輪となった。私が「1」を書き、その石に 1 本の線香をたむけ、

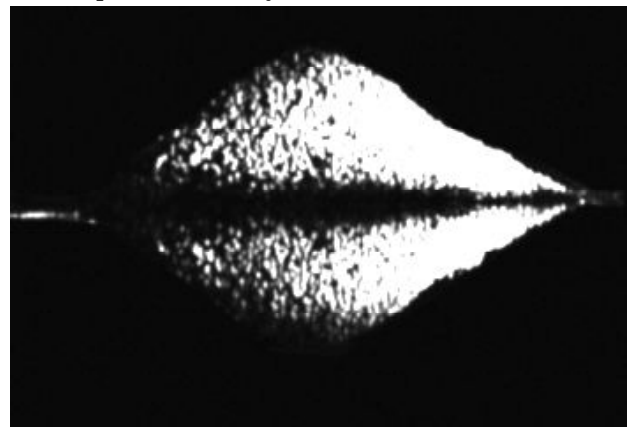
1996年6月（佐喜眞美術館前庭にて）みんなで作業が始まった。100 人前後の人が美術館の庭全体に広がって、思い思いに作業を続けていく。そのうち集計係から「一万個達成！！」と報告が入ると生徒たちから「10 万個？エーッ！まだ 1 万個？！」とドヨメキがおこった。20 万余りという膨大さに気が遠くなったのだ。

写経を思わせる黙々とした単純作業が続くうちに、しばらくすると生徒たちの中から、「1つひとつの石が 1 人ひとりのようね」「それぞれに、夢や想いがあったんだよね」「1 人ひとりの声が聞こえるような気がする」と話しているのが聞こえてきた。あちこちで若い彼らの中に様々な思いが湧きあがっている。彼らの中から「20 万余りの人間」という表現はおかしい、「1 人ひとりなんだ」という意見が出て、平和の礎の事務局に電話したところ、'96 年は 1968 人が追加刻銘されて、「236,095 人」となっていることをつきとめ、最後のひとりまではっきりすることとなった。

2 回の土日をつかった 4 日間で、述べ 600 人の人が参加して、「236000」まで番号が書き進められ、直径 200cm、高さ 150cm の円錐形の「石の声」の小山が完成、大雨の後には美術館の前

庭は大きな池になる。水面にライトアップされた石の山が映し出された。上下が重なってそこに大きな「唇」が出現した。それは今にも、この島の地下に眠る骨たちが「石の声」になってしゃべり出すような気がした。私は思わず息をのんだ。

一夜明けると何事もなかったかの様に小山の「石の声」があった。最後の 236,095 の番号が書き込まれ「石の声」が完成したときあちこちから歓声がおこった。全員で追悼の線香をあげて南部の海岸へお通しをする。踊りも一人の男子高校生によって奉納された。一生懸命踊る青年を見て、沖縄の文化の奥深さに感じ入った。何人かの生徒がスピーチしたあと、金城満は「君たちは作業中、死んでいった人々の声が聞こえる気がする」と言っていたけど、死んでいった人の声を聞くことはとても難しいことだよ。しかし、今回の一つひとつの作業が死んでいった人の声を聞く耳をつくるきっかけになるかもしれない。我々はそうした耳をつくっていかうではないか」とまとめた。



1996年（佐喜眞美術館）

5、6 年たって大学を卒業した子が来館し、金城満が 15 分間にまとめた「石の声」のドキュメンタリービデオをみて、「あの時私は高校 1 年生で、強引な金城先生にひっぱられて参加しただけとって思っていたが、今しみじみとその意味がわかります」と目に涙して語る若者が何人もいる。他府県から来館する人々が、「新聞、テレビを見て感動しました。『石の声』が沖縄のどこにあるかは知りませんでした。ここにあったんですね」と沖縄の精神の確かさに触れる喜びを口々に語っていかれる。開館間もない美術館に大きな力を与えてくれた。今でも自分のやっ

ている事が「空回り」「一人相撲」に思える時私を励ましてくれている。

「鉄の記憶」は、山のように積み上げられた丸太にイメージとして 3000 トンの釘を打ち込んでそれを火葬し、最後に残った灰と焼けた釘を古い巨大なビーカーに入れて展示したもので、戦争の加害と被害の関係、そしてその闇を考える作品で 2000 年にかけて制作された。

丸太は、731 部隊で生体実験に使用した中国人を連想させアジアを象徴している。3000 トンの釘は沖縄戦以来、未だに残る我々の足元の不発弾を、また、精神の内奥にある不気味な恐怖心や攻撃心を象徴している。高校生たちによって加害行為を象徴するものとして無数の釘を打ち込まれた丸太は、傷つけられた命であり、衝撃をもって迫ってくる。高校生たちは作業に集中するうちに加害行為に快感を覚えてくる自分に恐れおののき、誰もハンマーを持たなくなった。インターネットによる呼びかけに応じて、全国から丸太に釘を打ち込んだのが送られてくる。中には釘で「PEACE」と打ってくるものもある。それら全部をグランドにつみあげて火をつけた。火で浄化された後には被害を象徴した丸太は灰に変化し、加害を象徴した釘は、焼かれてもそのままである。



1998～99年（佐喜眞美術館）

ベトナム戦争の枯葉剤で死んだ赤ちゃんをアルコール漬けたビーカーを連想させる。巨大なビーカーに灰とその上に釘をびっしりいれて展示した。被害は浄化されていくが、加害の方はあいかわらず釘のままである。戦後、アメリカの傘の下にいることで何の反省もなく、加害の立場に立ち続けている日本のグロテスクな存在そのものにも見えてくる。

金城満は、沖縄のいま・現在の問題と真正面から対峙し、「表現行為を導き出すもの 石の声」で命の連鎖を、「鉄の記憶」で我々の精神の奥に未だに存在している大きな闇をアート（表現行為）の力で見事に深く表現した。

（佐喜眞美術館館長／さきまみちお）

## 県立の美術館が揺れている

### 画廊主のひとりごと

「沖縄県立現代美術館」（仮称）が来年 1 1 月開館を前に、現在、その運営と管理方法、名称など、策定された「基本計画」の内容から大きく外れ、さまざまな問題が浮上し、関係者の間で県当局の建設の進め方に注目を集めている。先月の 10 月 21 日美術関係者（美術館問題について大いに語る会実行委員会／代表・安座間安司）が開催した「第一回これでいいのか？ 県立の美術館シンポジウム 2006」（教育福祉会館）でその問題点が明らかにされた。「基本計画」では「沖縄県立現代美術館」と「沖縄県立博物館新館」は独立した機関として計画されたが、「沖縄県立博物館新館・美術館」という名称の一複合合体文化施設として建設が進められている事が明らかになった。

また、機能と役割の全く異なる機関を統合した複合一元化文化施設建設の在り方に、疑問が投げかけられている。財政上の理由で各館長も置かない「沖縄県立博物館新館・美術館長」となり、美術館と博物館を合体させた館長を一人（非常勤）の構成のようだ。各副館長を配し、運営に当たる学芸員が博物館班 12 人、美術館班 6 人と新聞報道にあります。因みに国内の同規模の美術館の学芸員は平均 15 人と言われる。この少数の学芸員体制で健全な美術館運営が出来るのだろうか？

更に、小泉前首相の「官から民へ」の流れに従い、県当局は指定管理者制度を導入し、企画運営を指定管理者に任せ、営利を追求する構えである。

先日 11 月 11 日の琉球新報の記事によれば、この問題を重視した美術文化 19 団体（喜久村代表）が稲嶺県知事に提出したこの問題点を指摘した「公開質問状」が県知事まで届いてなかった事が明らかになり、問題が更に深刻になった。

県歴史上初の県立の美術館であり、その建設に当たっては「基本計画」を遵守し慎重に進めて欲しいと願わずにいられない。国内最後の県立美術館ということもあり、沖縄の特異性と文化から他府県の関係者の注目度も大と聞く。

戦後の荒廃した時期に産声をあげた「沖展」、早くからその展示会場で公立の美術館を求める県民の願望が下敷きであり、来年開館予定の県立の美術館開館への県民の期待は大きい。公の「文化行政」とその文化施設運営をめぐる、どうあるべきか？ 私たちは次代を担う人々から、今その認識と責任が問われている。（うへはらせいゆう）

美術ファンの皆さんからの寄稿も歓迎で  
編集室

E mail ; se-u@tontonme.ne.jp

## 饒舌と寡黙のあいだ ～シリーズ・ドモル 「ことばのかたち」によせて

杉尾 幸司

人類は、いつごろから言葉を獲得したのだろうか。発音器官の構造の進化と、言語習得に必要な遺伝子の解析によれば、10～20万年前くらい前ではないかといわれている。言葉を持つことによって、さらに、言葉を文字という記号に置き換えることによって、獲得した経験や概念を空間と時間を越えて伝えることが可能になった。言葉を獲得できなかったならば、ヒトは文化を持つことができなかったであろう。

アイザック・ニュートンは、ロバート・フックに宛てた書簡で「もし私が、より遠くを眺めることができたとしたら、それは巨人の肩に乗ったからです」と述べている。ニュートンの偉大な業績も、ひとりがゼロか



ら生み出したものではなく、先人の業績の積み重ねがあったからこそ得ることができた。現在のわれわれの生活も、過去の偉大な先人たちの(言葉で表現された)遺産の上に成立していることは疑いようが無い

しかし、言葉によって伝えられた間接経験は、ある事象を安易に「理解」してしまう危険をはらんでいる。理解したつもりになってしまうことで、本当の意味での理解を阻害することがあるのではないだろうか。今日インターネット上には、膨大な情報が存在し、検索エンジンを駆使すれば瞬時に目的とする知識を得ることができる。しかし、そこにあるのは知識の集合体につきず、我々の頭脳の代替となるものではない。

また、ネットワークの仮想社会では、電子機器を介して遠く離れた人々ともコミュニケーションが可能である。しかし、ネット上でのチャットやメールのように画面上の文字情報のみで交わされるコミュニケーションは、五感のもたらすさまざまな情報が欠落している。ネット社会は、いわば身体を喪失した世界である。そこでのコミュニケーションに依存することは、現実世界での感触や感覚を十分に経験していない未発達な心と体を持つ子どもたちにとって、より深刻な影響をあたえる危険性を持っている。このような、身体を喪失した世界を成立させているのも別の意味で言葉の力である。

今回の作品「ことばのかたち」を見ると、現代の科学哲学に大きな影響を与えたハンガリーの哲学者マイケル・ポランニーの「暗黙知(tacit knowledge)」のことが頭に浮かんだ。暗黙知とは、言葉にすることができない認識や言語の背後にありながら言語化されえない知識を表す概念である。言葉での表現に集約される過程で、大切な非言語情報が削られてしまい、最も伝えたいことが伝わらなくなってしまうことがある。

金城満は、この言葉の危うさについて常に意識(もしかしたら無意識に)してきたように思う。開邦高校でのプロジェクト「石の声」では、23万余の石にひたすら番号を書き入れていくという単純な作業を通して、言葉によって理解していたはずの沖縄戦戦没者数が単なる知識にしか過ぎなかったことを、身体感覚を通して感じさせられた。

1996年(佐喜真美術館)

同じく「鉄の記憶」では、木片に釘をひたすら打ち込んでいく表現行為によって、内なる攻撃性と戦争における「加害と被害」について、身体全体を通して考え内面との対話を行うことができた。

言葉の獲得によって人類は、先人の残した英知の上に更なる英知の積み重ねを行うことが可能になった。その一方で、言葉によって伝えられないもの、伝えきれないものがあることも確かである。言葉では伝えられないものがあると気づいたときに、人は饒舌になることはできない。けれどもそれが伝えたいものであればあるほど、寡黙のままでもどまることもできない。言葉だけでは伝えられないことを知りながら、言葉以外に伝える手段を持たないときに人は、“ドモル”なのであろうか。饒舌と寡黙の間ともいえるこの状態は、新しいものを生み出すときの胎動なのかもしれない。安易に産み落とすことを拒否したこの状態は、迎え入れる我々の成熟をじっと待っているのではあろうか

(すぎお こうじ/琉球大学助教授理科教育・生態学)



1996年(佐喜真美術館)「石の声」完成

## 吃音思考・アートと ドモリのマル秘関係



金城 満

かかカッなり言いにくいのが「か行」である。たッタ「た行」がその次に言い難い。「肩こり」と言おうものなら「カカカッタッタガコッタ」と固くなってしまふ。

母音で苦手なものは、「あ、い、え」である。予想だが、咽喉から唇までの筒の中で複雑に筋肉が絡み合い、音が咽喉側に押し戻されて「あ、い、え」が発音しにくいのだろう。その点「う、お」は筋肉のすき間をスう?と、トお?り抜けられる。音が体温に近いたため筋肉を緊張させないのだろうか。「あ、い、え」は音に体温以上のものを感じる。しゃべるだけで消耗してしまう。

吃音、「キツオン!」。何とも発音しにくい言葉だ。同じ意味の「どもり」は症状としてやや軽度に思えてしまう。言葉のイメージとして、もう一つ重要なのが文字のカタチ、視覚的なものだろう。聴覚、視覚をあわせ重症の順番で書くと「キツオン、吃音、ドモリ、吃り、どもり」だ。おそらく、視覚が優先して構成している線の種類にもよるのだろう。この場合のカタカナは、直線的で、ひらがなと漢字は曲線的である。さらに例を挙げると、「カタイ、硬い、かたい」や「やわらかい、軟らかい、ヤワラカイ」等も文字のカタチによって、その度合いに違いを感じる。

私がドモリになったのは小学生の時である。友人を真似ていると完全にうつってしまい、戻せなくなった。自分がドモリになって初めて見えてくるものがあつた。「ドモリは治ります」という少年マガジンでの広告である。それを見て初めて病気であることを知った。ドモリ感染していたのだ。その後しばらくは日常会話が疲れる程のドモリがつつ続いた・・・。

高校生になり「小泉文夫の世界の民族音楽」というのを聴き始めた。NHK・FMで土曜日の早朝にあつた番組である。他のどの音楽番組よりも刺激的だった。この番組にはずるずる引き込まれ、またまた、戻れなくなった。特にガムランやケチャ、インド音楽や中近東の弦楽器、アフリカの打楽器の多様性には吃驚させられた。大袈裟に言うと、ドモルことで次々増幅していく感じがしたのだ。しかし、部分はドモッていても、全体の流れは止まることなくゆらゆらと流れているのだ。小泉文男自身の現地録音による音源はもちろんであるが、フィールドワークからくる実感のある解説にも身体を振動させられた。

大学生になり、いつものようにラジオのスイ

ッチを入れ聴き始めると、小泉文夫の追悼番組になっていた。しばらくは、何もきこえなかつた。会つたことも無い人に、茫洋とした喪失感をおぼえた。ドモル必要さえなかつた。

さて、視覚と聴覚からドモリを考えてみたが、タイトルの「アートとドモリのマル秘関係」である。ドモリについて、心理学や医学的な面は横において、ここでは表現としてのドモリを考えてみたい。

子供がドモル。大人がドモル。社会がドモル。沖縄がドモル。日本がドモル。2006年がドモル。思考がドモル・・・全てがドモッてみえる。ドモラされているのか、表現としてドモッているのか。普通、言葉は言いたい事が、餅やパンの様に内から膨らんできて、ぷわ?んとカタチになる。ドモリはカタチは見えるのだが、「ぷわ?ん」の直前でブルブル振動している。数回の振動でカタチになる場合もあれば、更に圧力が高まり破裂しそうになる場合もある。破裂するとカタチが無くなる。よって圧縮された圧力弁から何か逃がされていく。逃がされたものはマル秘となる。通常、マル秘はプライバシー保護や社会の安全に不可欠である。アートのマル秘は露出したり、わざわざマル秘と称したり様々。全てが分かる表現は有難がられないし、意味不明の表現も受け入れられない。安易な表現が生まれる素地がここにある。



2006年10月金城満氏のアトリエ

今、私が考える表現の方法は、ドモリの有効活用である。こんな事で威張っててもしょうがないが、40年間のドモリ歴はスジガネ入りである。今更ドモリを治したいとは思わないし、むしろツツかえるリズムが生きている実感である。アートの母体は現実そのものだろうし、間違いなく社会と繋がり共鳴しているはずである。2006年、沖縄の現実そのものが私に実感される現実である。口当たり良くイメージ化された沖縄もあれば、マル秘化された沖縄もある。ドモリに強みがあるとすれば、その少しズレた身体感覚だろう。普通にすんなり考え言える事を、あえてツツかえ考えてみる。その時間のズレから、言語化出来ないマル秘情報を視覚化する。言葉になる前の「ことばのカタチ」である。

(金城 満ホームページ<http://homepage.mac.com/mkingmking>)

(きんじょうみつる)

